

2 今後の指導に向けて

(1) 基礎的・基本的な学習について

小学校 改善の方向性

ア 基礎的・基本的な学習事項については、継続して習得・習熟を目指して取り組んでいく。

【小学校国語】

- 漢字やローマ字を読んだり、書いたりする機会を意図的・計画的に設定する。
- 豊かな言語環境の整備のため、辞書や辞典の活用のほか、日常的に使われる言葉についても意識する。

平成26年度から漢字についての課題が指摘されているが、平成27年度には「読み」について、平成28年度には「読み」「書き」ともに改善が見られた。漢字については「使っているか」が大きな要素となっているが、町内各小学校において日常的に練習や確認を行っている実態があり、今後の取り組みについても、より意識的に展開していくことが肝要である。

また、今年度についてはローマ字の「読み」「書き」に大きな課題があった。全国的な傾向であるが、漢字同様日常的には使われていないことが大きな要因である。しかし、ローマ字は漢字とは異なり、使用する機会が限られており、必然的に使用する部分としては、コンピューターでの文字入力時に限られてしまう。ローマ字についても意識的に触れていく機会を増やしていくことが求められている。

他にも言語に関する知識については、助詞の使い方、語彙力などの課題もあるため、漢字、ローマ字同様、児童を取り巻く言語環境を整備していく必要がある。そのために指導者が難しい言葉や違う言い回し等を積極的に使っていき、様々な言葉に触れさせる機会を多く設定したい。

【小学校算数】

- 計算をする機会を意図的・計画的に設定する。
- 数や量に関するイメージを豊かにするため、「数える」「はかる」などの活動について意識する。

算数については小学校1年から6年まで系統性が明確に存在する。つまり小学校入学時からの積み重ねが経年とともに習得から習熟へと変化していくのである。

よって、四則計算については、同じ様態の問題について解答した場合経年とともに誤答は減少する。ここから帰納的に考えていくと、一昨年来指摘されている分数の減法除法については、扱った経験が少ないため誤答も多くなるといえる。その解決方法としてはその時点での習得に留まらず、計算する機会を継続的に持つことが習熟には必要である。

また、数量や図形などの問題にも課題が存在するが、それらについても低学年の具体的な活動から高学年の抽象的な概念へと変化していく中で、具体と抽象のつながりを捉えられるよう、数や量に関するイメージを豊かにすることが肝要である。やり方や活動に終始することなく、どのようなイメージを持たせたいかを明確にし、授業の中で「数える」「計る」「測る」「量る」の活動を多く取り入れ、知識のみならず実感が得られるよう指導していく必要がある。

中学校 改善の方向性

ア 基礎的・基本的な学習事項については、習得・習熟させる上で困難な部分に焦点をあて、継続的に取り組む。

【中学校国語】

- 漢字や語句について適切に使用できるよう、習得・習熟する機会を意図的・計画的に設定する。
- 豊かな言語環境の整備のため、辞書や辞典の活用のほか、時や場に応じた適切な使い方を考え、話の構成を意識させる。

平成26年度から漢字や語句について経年変化を分析しているが、これまでの傾向同様、適切な読み、書き、使い方について課題がある。既習の漢字を使用したり、熟語の意味を文脈や訓読みから推測するなど、日常的に「使っているかどうか」が大きな要素となっている。辞書に書いてある意味から適切なものを選択する問いについても課題があるため、言葉についての意味やイメージに触れる機会を持つとともに、指導者自身もそれらを意識して使うことで言語環境を整えていくことが肝要である。

また、表現の工夫を捉え、効果の根拠を明らかにして具体的に考えを書くことについても課題があり、文章の目的や意図について考え、構成や展開の工夫をしてい

く学習などを多く取り入れた実践を考えていきたい。

【中学校数学】

- 四則計算、方程式を解く機会を意図的・計画的に設定する。
- 関数や図形に関する学習内容について、基本的な用語や意味を押さえ、それらと式や図のつながりについての理解を図る。

数学についても算数同様、系統性が明確に存在する。中学校では、1年の中で「数と式」「関数」「図形」というように同じ順番で領域が巡ってくる。つまり、学習内容は高度になるものの、方程式を学習するのは概ね1年後になるので、それまで知識を定着しておくには演習を通して習熟を図るなど、継続的な取り組みが必要になる。

平成28年度の調査においても、四則計算、一元一次方程式において全国との差が大きい設問もあるため、意図的・計画的に習熟を図っていくことが求められる。

また、関数や図形においても基本的な用語や意味についての理解が十分ではない設問もあり、活用に関する調査につなげるためにも、基礎的・基本的な内容の習得・習熟が欠かせない。

教科全体としては、問題を解いたときにそれを振り返ることが必要であり、普段の授業の中で結果への筋道を考え、意図した結果を求めるためにどこを修正していくか考える活動を取り入れることで、自分の力で課題を解決する力が育まれる。

(2) 考える・活用する学習について

共通の改善の方向性

イ 考える・活用する学習については、考えるもとになる事項、その使い方について、実践の中で実感できるようにする。

【小学校・中学校、教科 共通】

- 言語活動を充実させるために、児童・生徒が主体的に考える場面を授業内で意図的に設定する。
- 思考力・判断力・表現力等を育む学習活動を重視する。

児童・生徒が習得した知識・技能を活用する学習を展開するときに、言語活動は欠かすことができない要素である。その中で言語を使う活動に終わるのではなく、言語を用いて自分の考えを明らかにしたり、確認することが、主体的な学びにつながっていく。その形態としては、自分自身、ペア、グループなど様々であるが、その活動としては、自分が気づいたこと、感じたこと、考えたことを説明したり、論述させたりすることとなる。このような活動をどのような場面で、何を題材として取り組んでいくのか、また、その活動の主体が児童・生徒になるよう、授業のねらいや組み立てを意図的に設定する必要がある。

また、読む・読み取る→考える→書く→説明する等の流れのある学習活動を展開し、思考力・表現力・判断力を育むことが必要である。そのために考えたことを表現・交流する場を設定し、課題の解決に向けて言語を使って表現させることが学力向上には必要である。活動の中では、自分が分かっていることは何かを明確にし、それをどのように使うのか判断し、お互いの考えを伝え合い、自分や集団の考えを発展させることを大切にし、また、その後自分でもう一度考えるという流れを学習の中に取り入れていくことが、知識の「活用」に関する力をつけていくこととなる。

発達段階に応じてではあるが、目的や意図に応じて、考えに論理を持たせ、内容の構成を工夫し、どのように伝えるのかを考えるという一連のサイクルを授業内でどのように取り組んでいくのか、またその先に児童・生徒のどのような育ちがあるのかを明確に打ち出し教育活動を展開していかなければならない。授業で活用を促す取り組みについて児童・生徒も実感できるように、授業改善の取り組みについての観点を詳細に設定していくことが肝要である。